島と野獣

――『蠅の王』を読む――

杉山洋子

I

島は大体船の形をしていた――島のこっち端、少年たちの背後には小高い山があり、岩と木の間を縫っておりてゆくと浜に出る。島の両側は左右とも岩と崖と森の険しい斜面だ。船の前部を見ると、ゆるやかな山腹一面の森にピンクの岩が点在し、その先はうっそうと茂る緑の森の低地、突端はピンクの尾をひいている。そして、島が海に消えたところに別にもう一つ、島というか、岩があった、緑の森の向こうからこっちを向いて砦のようにそびえる不敵なピンクの城砦があった(1)。

孤島に命拾いした者の常として『蠅の王』(一九五四)の少年たちも先ず状況把握のために山に登った。それが島なのかどうか、また無人島なのかも知らねばならない。『ロビンソン・クルーソー』(一七一九)もヴェルヌの『十五少年漂流記』(一八八八)も見開きに地図が掲げてある。クルーソーの島は南米、大西洋側のオリノコ川河口の島だったし、十五人の少年がチェアマン島と名付けたのは同じ南米でも大西洋側にある群島の中のハノーヴァー島だった。どちらも世界地図に実在する。

蠅の王の島はインド洋か南太平洋にあるらしいがはっきりしない。それに、これは近未来の核戦争中という架空の

時間の中の島で、少年たちは英国から空路安全地帯へ疎開するところを撃墜されたが、実に奇跡的に機体から脱出して助かったのである。時も所も特定されず、名もないけれど、島の自然はこと細かに描写されている。地図などついていないのは意図的なのかどうか、ともあれ、読者はこの船の形をした島のここかしこを心に描き出しながら読み進むのである。

ゴールディングによれば“An island must be built, and have an organic structure, like a tooth.”[2]なのだそうで、『蠅の王』の寓話性[3]も全面的に島の自然に組みこまれているのである。寓話の島といえばM・スパークの『ロビンソン』（一九五八）の島は、なんと人間の形をしていて、後日海中に没してしまうのだが、同じく飛行機事故で島に囚われた語り手にとって、島は「心の時間、心の風景」であり「心の中の場所」[4]なのであった。二十世紀のロビンソンたちは海に難破するのでなくて、人間や船の形をした寓話の島へ、空からまさに落ちてゆくのである。

さて、『蠅の王』の少年たちが山頂から見渡すと、

> 珊瑚礁は島の片側とあと少しを囲んでいて、自分たちのものだともう決めこんでいるあの海岸のあたりでは一マイルばかり沖に横たわっていた。何だか、巨人が身を屈めて島の形を海中にチョークでなぞろうとしたが途中で嫌になって止めた、とでもいうように海に珊瑚の筆あとがあった。礁湖は孔雀色の水と岩と海草の水族館みたいで、外側は紺青の海だった。潮が流れて泡立つ波が珊瑚礁に長い筋状の尾をひき、この船はひたすら後向きに航行している、という感じだった。(LF, 31)

島の船は少年たちを乗せて逆行する。かつてマーローの船がコンゴ川を遡りアフリカ大陸の暗闇の奥地に近づくほどに歴史を逆行し、原始の欲望むきだしに象牙の鬼となり果てたクルツにたどりついたように、少年たちはたちまち殆んど裸、赤や白の粘土で顔をくまどり手製の槍をかついだ野蛮人になってしまう。彼らは豚狩に興奮し、次には人間狩を始めるが、何のことはない、これは実は原始帰りではなくて、核戦争に余念のない大人たちの少年版、暴力の鏡像だったという恐怖を、『蠅の王』は語るのである。島の船は逆行しているように見えるけれど、花崗岩でできた

この島は歴史のこの時点を微動だにしない。人間性は何万年まるで変っていない。文明という衣装をむしりとればたわいもなく野蛮人の残忍性がむきだしになる。というより、その文明こそ兇器たりえるのだ。大英帝国海軍軍人として五年間第二次大戦に参加して思い知ったのはこの事だったと、ゴールディングは繰返し語り、書いている[5]。『蠅の王』は、大戦で知った苦い知恵の果実なのだった。

さて、はじめ、島はラルフにとって楽園かと思えた。子どもだけの島――山頂といっても少年たちの足ですぐ登れるほどの高みから全景が見渡せるというなら、六歳から十二歳までの学童にふさわしい小っぽけな島である。原生林の濃緑と花崗岩のピンクに色どられ、果物は食べ放題、浜にはまさに願ってもない自然のプールがあった。白い蓮の浮かぶ池、清流、岩間に咲く青い花に蝶が舞っていた。砂浜にクリーム色の珍しい大ほら貝が埋もれていた。これを民主主義のシンボルに見たててイギリス少年たちの孤島の生活が始まった。

だが現実に孤島暮しが素晴しい筈もない。ロビンソン・クルーソーの手記がそれを証明している。『ツバメ号とアマゾン号』（一九三〇）の子どもたちだけのキャンプは両親の目の届く湖の島で行われたのに苦労が多かったのだ。まして『蠅の王』の少年たちは着のみ着のまま、文明の利器といえばジャックのナイフとピギーの眼鏡のレンズだけ。無人島文学の伝統をくつがえすこの小説には、苦難の果てに待っている〈幸福な結末〉も、もちろんない。島の楽園の果実はバナナ、ココナッツ、及び名前のわからない緑のゼリー状の果物などだが、これは空腹を充たしても慢性の下痢の種でしかない。やがてラルフが認識するように、島は二つの顔をもっていた。船首に向って右側（the right side）は礁湖が孔雀色の海を囲いこんで、鮫のいる外海から島を守っている。少年たちははじめこのやさしい側（フレンドリー・サイド）で遊び楽園を夢みたのだった。左側は右側と似ても似つかぬ恐しい荒海（アンフレンドリー）だった。左右正反対の顔をもつこの寓話の島は心の風景とも思えるが、同時に「歯のように」生きている。小説『蠅の王』は寓意と写実が表裏一体のメビウスの輪である。そういえば、島の自然と、少年たちの心の風景、「人の心の暗黒」“the darkness of man's heart”(L.F,

223）の風景も互いに鏡像の如く照応しあって、現代小説の恐怖の極みとも思える『蠅の王』を構築しているのである。

Ⅱ

島は無人のまま、おそらく太古から、大海に浮んでいた。その原始の自然とゴールディング自身の古代愛に敬意を表して、島の特性を土、火、空気、水の四大元素に見立てて調べよう。それと、島の生物についてもである。島の自然と侵入者としての人間の関わりはどのようなものであったか。

島は原生林に掩われていた。木々には夥しいツタが絡み垂れ下がり、いたるところ行く手を阻んでいる。だが、この島の際だった特徴は土よりもピンクの花崗岩である。土と違って岩は木を育てない。少年たちが集会の場として選んだ平たい岩、会議（プラットフォーム）岩は砂で掩われているが、そこに生えたヤシは根をはることができず倒れてしまう。倒れたヤシは集会用のベンチになるがその三分の一はぐらついて坐りが悪い。足元には「どくろのようなヤシの実」が転っているのも不気味だ。花崗岩は島の美観とみえて実は無言の敵意を隠している(6)。

大体この島の土台が花崗岩なのである。大地の深部に根を下ろした岩は、平たく台状に海に突きでたり、塊りになって重なり、重なりながらぐらついたりしている。島の形を偵察するために岩をよじ登り、暗いけもの道を山頂へ向かう途中、ラルフ、ジャック、サイモンの三少年は小型車ほどもある大岩を見つけて早速よいしょよいしょと力を合わせて突き落す。

大岩はためらい、片足で爪先だちになり、もう元へは戻れぬとわかって宙を蹴り、落ち、打つかり、転び、うなりながら、跳び、

原生林の屋根に深い穴をぶち抜いた。木霊と鳥の群が飛びたち、白とピンクの塵が舞い上り、遙か下の方の森が怒り狂う怪物に蹴ちらかされたようにおののいた、と思うと、島はしーんと静まりかえった。(LF, p. 30)

岩は人間の身振りをした怪物(モンスター)になった。岩落しはこの後四度繰返される。二度目は獣退治にでかけた時島の先端の城砦で、「巨大な水車のような」(LF, 118) 赤岩をヤシの幹を挺子に海へ突落す。後はもう遊びではない。三度目、ロジャーがねらい定めて落した赤岩はピギーを打った。すると断崖の下で待ち受けていたかのように「死の岩が波間に赤く開き」(LF, 209)、その頭を割った。四つ目は戦車のような巨岩、更に五つ目はローラー車ほどのがラルフをねらい、僅かに外れて「巨象の勢いで」(LF, 214) 森を切り裂き浜へ突進していった。

そういえば、すでに、少年たちを乗せた飛行機が撃墜された時、火を噴きながら島を切り裂き、海に消えたのであった。『蠅の王』の冒頭で、まるでその傷跡 (scar) から生まれでたようにラルフは浜に姿を現わしたのだった。人間が大地に作った道、たとえば自動車道のこともゴールディングは〈傷跡〉とよぶ[17]。野豚が島につけたけもの道はそうではない。島を傷つけ破壊する少年たちはまさに、炎上する飛行機の落し子、文明の申し子なのであった。

島の岩は、珊瑚礁側の会議岩ではピンクだが、豚狩の宴とサイモン殺しの平岩から先端の城砦へジャックの率いる狩猟隊が移動してゆくにつれて赤さを増す。少年たちの変容を写すように、墜落するピギーを待ち受けていた海中の大岩は血の色をしていた。

岩は少年たちが触れると戦車や爆弾や象に変って森を破壊した。無人島物語は常に漂流者が島にどのように文明をもたらし築いてゆくかを語るが、少年たちが島の自然に持ちこんだのは当然ながら〈火〉であった。

火ほど文明そのものといってよいものはないだろう。火山の噴火、落雷、自然発火の山火事など、火の破壊力の恐しさもさることながら、ひとたび捕えれば火は日々欠くべからざる文明の原動力である。

ピギーの眼鏡のレンズで作った火は何よりも先ずのろしをあげるための救助と希望のシンボルであった。ところ

が、遊び気分で枯枝を山と積み点火すると焔はちろちろ燃えながら幹を這い登り枝から枝へ素早く跳び移って、瞬く間に四分の一マイル四方の森が煙と焔に変貌した。火ははじめ小さい「赤いリス」のように「木を貪りながら駈け降り」、「森をわがもの顔に嚙みしだき食い始めた。」少年たちはわっと喚声をあげる。「焔は何か野性の生きもののようで、腹を地面につけてジャガーそっくりに這い」若木をねらう。燃えるツタを見て「蛇だ、蛇だ」と大騒ぎだ。燃えさかる火は「二十五フィートのひげを宙に振りたて」て巨人になる。燃え狂う音は食人種の叩くドラムの音、あたり一面地獄の劫火とも見えたが（LF, 45～49）、ようやく鎮火した時、顔の左側一面あざのあるチビが一人消えていた。この第二章は最終章の島の炎上と人間狩を早くも予表している。タイトルの「山で火が燃える」（"Fire on the Mountain"）はマザー・グースの歌遊びの一節で、隠し絵の如く象嵌されて提喩（シネクドキ）となっている[8]。

山頂からのろしの煙を空へ送りだすための火は狩猟隊長ジャックにとって獲物の豚の肉を焼く手段であった。焚火を囲み車座になって脂の滴る肉を食う。輪になって豚狩ごっこを始める。すると再び血の記憶が燃え狂ってサイモン殺しを触発するのだが、その時少年たちの集いの輪の中心に火が燃えていたのである。

赤岩が少年たちの手で巨大な兇器となったように、木と太陽と空気から彼らが呼び起した火は、やがて島をなめつくし、火つけの当人たちをも貪り食うほどの力を持つにいたった。そういえば少年たち以前にこの島に火を持ちこんだのは他でもない、エンジンから火をふいて墜落したあの飛行機である。その時は大雨が消火し、台風が奇跡的としかいいようのない手際でこの文明の残骸を跡形もなく海中に片づけたのだったが、その落し子たちは火を欲しがり、作り出し、もて遊び、利用し、遂には武器とするに至った。

人間が自然（nature）に手を触れると、自然は鏡のようにその本性（human nature）を写して、岩は爪先立ちになり、火はひげを振りたてて暴れた。それだけではない、この人間に似た岩や火は獣（beast）にも似ており、後で述べるように、この〈獣〉こそ少年たちの恐怖と島の生活の破綻の元兇となるのである。

その船に似た島を囲む海。ピンクの会議岩のおよそ反対側にピギーの頭を割った赤い平岩があり、火がのろしや団らんの焚火とも、燃え狂う山火事ともなるように、海も二つの顔を持っていた。

島に落ちてきたラルフが最初に見た海は珊瑚礁に抱かれて青に緑にうつろうやさしい母なる海だった。自然のプールは暖かで安全な母胎のようだった。だが、野獣偵察のためジャックの先導で島の突端に行った時、ラルフは島のもうひとつの顔を見たのである。本島と砦岩をつなぐ巾二、三ヤード、長さ十五ヤードほどの隘路に立ち止り見下ろすと右手の海は穏かなのに左手はまるで違っていた。

今はじめて陸地から大波のうねりを見たのだった。途方もなく巨大な生きものが息づいているように見えた。波がゆっくりと岩の間に沈んでゆくと、薄赤い平たい花崗岩、異様な形の珊瑚や海草が姿を現わす。原生林の屋根を吹く風のように囁きながら波がぐんぐん引いてゆく。あのテーブルのように平たい岩は四方に海草が生えていて、波が吸いこまれてゆくと崖のようだ。それから眠っていた水の巨獣(ビヒモス)が息を吐く——海が盛り上がる、海草がなびく、そして波が吠えてあの平岩の上で泡を噴く。波は寄せてはかえすというのとは程遠く、深く長い息使いで岩から落ち、上がりまた落ちるのであった。(LF, 115)

この後、少年たちは島の左側の岩場を縫って走るけもの道を伝い、島の長さいっぱいに押し寄せてくる大波濤を見る。大海原が起伏し呼吸している。海草は濡れて光る髪のように岩にへばりつく。波が「岩の裂け目から腕を振り上げ、波しぶきの指を拡げて」(LF, 121) 足元近くせまってくる。

海は人食いの原始の巨獣であり、また髪をなびかせ手を差しのべて摑みにくる死の母にも似ていた。赤岩に落ちたピギーの血を洗い、死体をさらっていった。やさしい右側の海は仲間に殺されたサイモンを抱きとり、きらめく夜光虫の屍衣を着せて沖へ連れ去った。同じ海が、突風に島を追われたパラシュート兵の死骸をも呑みこんだであろう。すでに撃墜された機体をも呑んでいる。仮小屋で眠るチビたちは波の音を子守歌ならぬ水の巨獣 (Beast from Water)[8] の息使いときいたのであろう。夜毎海から這い上ってくる大イカの悪夢にうなされた。

海は島を中心点として円形に張りつめた鏡の如く、人のかたち、獣のかたちを写し出す。

海は空をも写していた。海とその中心にある島を包みこむ空気は少年たちの心のアナロジーである。熱帯の海は空から熱と光の直撃を受けて熱を帯び、正午頃ものの形が揺らめきだす。きらめく海が盛り上がり、珊瑚礁やヤシの木が宙吊りになる。「真昼時、この幻(あやかし)は空と融けあい、見上げると太陽が怒った目のようにこちらを見下ろしていた。」(LF, 63) 物識りのピギーは直ちに、あれは蜃気楼だ、と説明するが、島の自然に慣れるにつれて、ラルフの判断力は不透明に揺らぎだす。「これはいい島なんだ」(LF, 37) という幻想が消え、サイモンだけが直観し得た真理に目覚めるには悪夢の暗夜行路の果までゆかねばならなかったのである。

真昼の自然のあやかしの陰画のように、夜の闇の悪夢でチビたちは野獣 (beastie) を見た。それは蛇みたいなもの (a snake-thing)、海から這いあがってくる大イカだ、ともいう。野獣の正体、その有無について議論するうちにラルフとジャックの間の溝は深まり、ピギーとラルフが大人の介入を祈願する ("If only they could send us something grown-up...a sign or something." LF, 103) と、それに応えて〈風〉が死んだパラシュート兵を島に送りこんだ。島の上空三マイルあたりで輪を描くようにしながら山腹に落下し、再び風にあおられて青い花の群生する赤岩の上をにじり登って、山頂に居坐り、大切なのろしの場所を占領した。このおぞましい風の操り人形を、双子のサムエリックも偵察隊のジャックもラルフも皆、野獣だ、と決めこんで逃げ出した。死体を操り動かして野獣と見せたのは風の仕業なのだ。そういえば、この兵士も少年たちも、撃墜されて火をふく飛行機から出現した同じ素性のものであった。天使ならぬ戦死者と、かっては天使の声で歌った聖歌隊の少年たちは空から落ちてきて島に終末をもちこんだのである。

Ⅲ

そもそも少年たちの無人島の夢を恐怖の悪夢に変えたのは幻の野獣の出現であった。最初の発言者は顔の片面があざのチビだった。〈野獣〉とは何か？　が会議岩での中心議題となり、それはまさに『蠅の王』の主題なのである。野獣とは何か？　こんな小さな島に猛獣がいる筈はない。いるのは野豚、兎かなにか跳ねるもの、かもめ、けばけばしい色の鳥、蝶、蜂、そしてもちろん蠅……平和な島だったのだ。あざの子は蛇みたいなもの、野獣が夜の森から「出てきて帰ってまた戻ってきて僕を食べようとした」(LF, 39) と訴える。間もなくこの子は、悪夢のお告げ通り、リスのように跳び、蛇のようにもだえ、ジャガーのように這う焔に食われてしまった。

野獣とは何か？この問にサイモンが答を出す。“Maybe...maybe there is a beast... What I mean is...maybe it's only us...We could be sort of...” (LF, 97)

口下手でちょっと頭がおかしいと仲間に思われているから、サイモンのこのとまどいがちの発言はその場で無視されてしまうけれども、サイモンだけが答を知っていたのだ。何故か。それは持って生れた不思議な直観と予言の力ゆえとしか言いようがない。チビたちに果物を、除け者のピギーに豚肉を食べさせ、悪臭を放つ死んだ兵士を縛るパラシュートの紐を烈しく嘔吐しながらも解いてやるサイモンは、作者自身説明するように、キリストになぞらえてある。野獣と人間の姿を重ねて直観してしまうサイモンの答は唐突で謎めいてきこえるが、実は、野獣の姿はこの小説のページの至るところに隠し絵のように潜んでいるのである。島の自然、岩、焔、海、空にも獣の姿が見え、それは人間にも似ていたことはすでに見た通りである。そして島の最初の侵入者である少年たち皆、サイモンさえ、野獣に擬せられるのである。

誰よりも顕著に獣性をあらわすのは元聖歌隊長で狩猟隊長のジャックである。第三章「海辺の小屋」の冒頭に、野豚を探して四つん這いでツタと下生えをかきわけ進むジャックの姿の細部描写がある。肉に飢えて狂気の目をぎらつかせる少年は犬の姿、猿（ape）の姿をしていた。仲間に豚肉をふるまい首領の座につくジャック、「その肩には権力が猿のように腰掛けてわめいていた。」（LF, 165）この寓意的な猿はジャックの心情の古典的なアレゴリーだが、そういえば山頂に居坐った死んだ兵士も大猿に見えた。野獣狩を企てた時、ジャックは“Yes. The beast is a hunter.”（LF, 139）と、われ知らず野獣と自分を同化している。そしてこのようなアイロニーはいたるところ言葉のすみに潜んで、意味に意味を重ねているのである。

ラルフも夜の会議岩で、山頂の獣を予告するような「黒くうずくまる姿」（LF, 96）を見せる。そういえば、島の最初の探険の時、野豚をみつけて誰よりもいきりたったのはラルフだったではないか。その後、雄豚の鼻面を槍で突いた時もラルフは暴力に酔い、ジャックをけしかけた。爆発しそうな野性と、健全な自制心と、英国南部の穏やかな自然に抱かれた故郷の町への強烈な郷愁――相反する両面を合わせ持つゆえに、ラルフは最後に「人の心の暗黒」に泣きじゃくる主人公たり得るのであるけれども。

サイモン。おぞましく腐臭を放つ死んだ兵士にさえ優しかったサイモンは野獣として殺される運命を担っていた。真夜中に森の中の瞑想の場所へ向う時チビたちに幽霊か獣と間違われた。サイモンはその隠れ場所から、ジャックが島の野獣、実は死んだ兵士に捧げた豚の首を見る。豚の首は蠅の群にむしゃぶりつかれてふくれ上っており、自分は野獣であり、蠅の王（ベルゼブブ）（Lord of the Flies）だと名乗る。てんかん症のサイモンは古代の予言者たちのように発作の力でこの野獣と不思議な対話を交わすのである。

これは『蠅の王』の批評家たちが引用せずにはおかない問題の箇所なのだが、ここでは幼い予言者サイモンに焦点をあてることで、島の野獣の正体を狩りだしてみよう。串刺しの豚の首の言葉が、大人子どもの区別なく人間に内在

する野獣性についての説明であるのは自明のことだが、同時にこれは間もなく起ることの正確な予言であった。

サイモンがきいた野豚の頭の声は“I'm the Beast.”“I'm part of you.”と言っている。この問答は発作を起した当人の自問自答なのだから、問い、答えるサイモン自身が自らを〈野獣〉と名指しているとも言える。その声は学校の先生そっくりでもあった。先生の声は「野獣は人間の中にいる」のだという真相を知るサイモンを脅し警告する。「山を降りたら浜でわたし（＝野獣）が待っているのだよ……逃げても駄目だ」（“You know perfectly well you'll only meet me down there...so don't try to escape.” LF, 158）それでも山を降り仲間に真実を告げようとするサイモンに、声は続ける。「お前は邪魔者だ」「片付けてしまうぞ」（“You're not wanted.”“We shall do you.” LF, 159）〈わたし〉は〈われわれ〉に変り、そのわれわれとは「ジャックとロジャーとモリスとロバートとビルとピギーとラルフ」だと、野豚の首は言うのである。なるほど、その声は大人の基準を絶対視するピギーを連想させるし、ラルフそっくりに“We are going to have fun on this island!（LF, 159）と繰返す。更に結末の救い主ならぬ救助者、あの白服の海軍将校の“Fun and games.”を予表する。豚の首は先生の声で「行って仲間とお遊び」といった。だが丁度その時、少年たちは浜で輪になって野豚の肉を食い、“Kill the beast! Cut his throat! Spill his blood!”と歌いながら豚狩ごっこに我を忘れていたのである。

発作を起した「サイモンは巨大な口を覗きこんでいた。口のなかは真暗、広漠たる真暗闇であった。」（LF, 159）サイモンは失神して、暗黒の口に呑まれてしまう。獣の口に呑まれる――恐怖の悪夢は間もなく現実となるのである。サイモンは息を吹きかえし、山頂の野獣が実は無害の死んだ兵士であることを発見して、仲間に真相を告げるため山を駈けおりる。青白い稲妻が天を裂き（the blue white scar）、落雷が地獄を思わせる硫黄の臭を漂よわせるなかで、少年たちの豚狩儀式[10]の歌と踊の輪が「生きものそっくりに」ぐるぐる回っている。真中で豚の役を演じていたロジャーが狩人の輪に戻ると「輪の中心がぽっかり大口をあけた。」サイモンが森から這い出てくると「円は馬蹄形にな

った」、そして「野獣は馬蹄形のなかによろめき転げこんだ。」(LF, 168) 少年たちはその獣を（恐ろしいことに意識の底のどこかでサイモンと知りながら）棒で殴り、馬蹄形の大口を噛みしめた。「襲いかかり、岩の上になだれ落ち、野獣めがけて跳び、わめき、打ち、噛みつき、裂きさいた。」(LF, 168) 自ら予見した通り、サイモンは野獣として、少年たちの群が形作る巨獣の大口に呑まれ、食われたのである。

サイモン殺しは、この島の風景のいたるところに隠れていた野獣の姿を大写しにし、その正体をいやが上にも明らかにした。この野獣のもう一人の犠牲者はピギーである。幻視者サイモンは実にふしぎな少年だが、それに輪をかけたのがピギーのようだ。『蠅の王』は「実に多様な解釈」が成り立つ作品だと作者自身認めている[3]。この「何もかもが二重性をもつ両面価値的な書」[2]でその曖昧さの最たるものはピギーであろう。

喘息持ちで強度の弱視で、そのあだ名通り極度に太っている。終始ピギーと呼ばれるだけで本名はわからない。ピギーは何者か。ピギーは果物をたらふく食べては腹を下し、よだれをたらして野豚の肉を貪り食う。ピギーは砦から突落された赤い巨岩に打たれ、うなり声 (grunt) ひとつあげずに「四十フィート下のあの海中の四角い赤岩にあおむけに落ちた。頭が割れ、中味がとびだし、真赤になった。ピギーの腕と足は屠殺された豚のようにけいれんした」(LF, 200)

ピギーは豚に擬せられているが、他方、一番の物識りであり、島の〈科学者〉、政治家である。大人の信奉者、代弁者でもある。他の少年と違って身体を動かすことが極端に少なく、いわば反自然児であり、自然から遠いだけ文明人だともいえる。ピギーは、砂に埋もれた貝に息を吹きこみ民主主義の道具とすることをラルフに教える。何よりもピギーはこの島で始めての火を作るための道具の所有者である。のろしのための火が殺した豚の肉をあぶる焚火にすり変り、やがて人間狩の猛火に変じたことはすでに見た通りである。サイモンの時と違って、ピギーが意図的に、憎しみをこめて殺されたことは、ピギーが代弁する文明の声への少年たちの叛逆ではなかったか。自然もピギーに対

して残酷だった。それはピギーが核の時代の反英雄的な擬似プロメテウスだったからではないか。少年たちが島の自然を破壊し野豚を殺した報復として、人間の豚のいけにえを島が欲したのだ、とも思えるのである。

サイモンは野獣と間違われて殺され、ピギーは豚のように死んだ。だが、この二度の殺人以上におぞましく凄じいのが、サイモン殺しの少し前に行われた雌豚殺しである。

のろしと豚狩、更に幻の野獣退治をめぐってラルフとジャックの仲は決裂し、ジャックは会議岩を去って狩猟隊と豚狩にでかける。木蔭で安眠を貪る豚の群を発見、目当ては群で最大の雌豚である。黒とピンクの豚の腹には子豚が一列に並んでかじりつき、正に母性の至福そのものの姿である。そこへ「どこか未知の世界からのこの恐怖の出現」(This dreadful eruption from an unknown world, LF, 149) に、平和な森は修羅場と化した。この島で前代未聞の流血だったであろう。輪になって豚を囲み、島で最初の刃物であるジャックのナイフで森の木を尖らせて作った槍で、めった突きにする。ロジャーがしたことはもっと恐ろしい。“Right up her ass.” とロバートがその行為を言葉にすると、少年たちはわっと喚声をあげる。雌豚殺しは母殺しというだけでなく、何とも隠惨な母を犯す行為だったのだ。

この島の主は豚たちであり、大きい母豚は島の女王であったろう。多産な豚は豊穣の象徴であり、古代ギリシャ人やケルト人にとって聖獣であった。木々や岩と同じく、野豚は島の自然だった。タイトルの「蝿の王」の奥の奥には案外そういう意味も隠れているのかもしれない。サイモンが対面した豚の頭はこの雌豚の頭だったのだし、旧約のベルゼブブも遙かな昔、異教の豊穣神だったという。それを野獣神に変えたのは誰か？ サイモンを呑みこんだ豚の頭の涯しない暗闇の口、ピギーを呑んだ荒海のレビヤタン――自然も人間も野獣に擬せられ、しかも自然の底しれぬ暗い生命力と、結局は矮小な裸の猿である人間の罪ある破壊力の、自然対文明の、これは闘争の物語なのかもしれない。

島の楽園を破壊した少年たちは空から落ちてきた堕天使だった。燃える機体から脱出して引裂かれた島の裂け目か

ら現われた少年は、いわばひとつの死を通過して原始ながらの自然界に再生したといえる。彼らは島に人為を持ちこんだが、同時にその自然に呼び起されたかのように本性に潜んでいた〈見知らぬ他者〉が出現した。『蠅の王』の原題は“Strangers from Within”というものであったが[13]、この他者なるハイド氏とはいうまでもなく、〈野獣〉である。その無形の野獣がさまざまに変幻を繰返しつつ言葉の中に潜んでは出現し、この小説の多層の意味を醸しだす有様を読者は眺めてきたのである。

これは終末の物語である。しかもこの現代の黙示録（アポカリプス）の結末には救いがない。炎上する森の劫火の中から、追われるラルフを先頭に、追う狩猟隊の少年たちが走り出て、眩しいばかりの白服の大英帝国海軍士官に救助される。だが、この機械仕掛の神は「白馬にまたがった救世主、Lord of Lords」（『ヨハネ黙示録』一九・一一～一六）ではない。この核戦争の戦士は、あの串刺の豚の首のように「歯をむきだして笑い」（grin）、サイモンが聞いた学校の先生とそっくりな悪魔王（ベルゼブブ）の言葉で事もあろうに少年たちに教訓を垂れるのである。

大体、英国の戦艦に救助されたところで少年たちはどこへ帰れるというのだろう。故国は今や文明の廃墟と化しているだろうに。

もう首領でも隊長でもないぼろぼろの姿で泣きじゃくる少年たちの背後で島全体が燃えている。船の形をした燃える島を中心に、円形の海と空の世界がある。輪を描いて張りつめる水平線の彼方から侵入してきた戦艦は、あたかももうひとつの動く島のようだ。島の形の戦艦に乗り移った子どもたちはそれからどこへ向うのだろうか。どこか別の円形の海の中心点でこの船も炎上するかもしれない。そして巨獣（レビヤタン）なる海に呑まれるのか。

Ⅳ

『蠅の王』は救いのない小説だといわれてきた。この暗黒に僅かでも光明があるとすれば、それはガリバーの「馬の国」と似て、作者の深すぎる嘆きの源そのものである理想主義を読みとらずにいられぬからであろう。

ゴールディングは自分は本当はオプティミストなのだと、一九八三年のノーベル賞受賞講演で語ったが(4)、〈救い〉は『蠅の王』から二十五年後に *Darkness Visible* (1979) において示された。棺に入って海から帰還したイシュメールのように、島の少年たちがマティに再生する。マティはラルフのように空襲下のロンドンの猛火の中から裸で走り出た。マティの顔の左側一面の火傷跡はあのあざのあるチビ、半分禿げた頭と大人くささはピギーに似ている。黒髪と言語障害と幻視の力はサイモンを呼びおこす。火から現われ、火に呑まれて殉死するマティは微力な現代のキリストなのだが、そのことについて書くのは別の機会を待とう。

註

(1) William Golding, *Lord of the Flies* (Faber, 1973), p. 31. 以下本文中に LF の略号とページ数で記す。
(2) W. Golding, "Islands," *The Hot Gates* (Harcourt Brace Jovanovich, 1961), p. 109.
(3) W. Golding, "Fable," *The Hot Gates*, pp. 85–101.
(4) Muriel Spark, *Robinson* (Macmillan, 1958), p. 1 ; p. 185.
(5) W. Golding, "Fable," p. 92 ;『蠅の王』の主題は "grief, sheer grief, grief, grief, grief" なのだ" と『リア王』の言葉を借りて言う。"A Moving Target," *A Moving Target* (Farrar, Straus, Giroux, 1982), p. 163.
(6) 「なぜ石の世界は敵意に対する敵意、制御された恐怖に対する無言の敵意を、人間に送り返さないことがあろうか」ガストン・バシェラール『大地と意志の夢想』(思想社、一九七二) 一九六ページ。

(7) W. Golding, "The Hot Gates," *The Hot Gates*, p. 16.

(8) Iona & Peter Opie, *The Singing Game* (Oxford U. P., 1985), pp. 317-19. この遊びは二重の輪になってする椅子取りゲームの一種で、場所をとり損ねた外れ者は、罰として服を脱がされることがあるため、男の子の遊びとされている、ということの他、歌に『蠅の王』を暗示する箇所がかなりある。たとえば、

Fire on the mountains, run, boys, run!
You with the red coat, follow with the gun.
The drum shall beat and you shall run,
Fire on the mountains, run, boys, run.

とか、Hogs in the garden, catch'em Towser ; で始まるのもある。

(9) "And I saw a beast rising out of the sea." (Revelation, 13 : 1)『蠅の王』は多くの箇所で『ヨハネ黙示録』と深く関わっていると思う。

(10) Bernard E. Dick, *William Golding*, (Twayne Publishers, 1987), pp. 11-16. 少年たちの狂気の加き豚肉の宴と、儀式ごっこをエウリピデスの『バッコスの信女』になぞらえている。

(11) W. Golding, "Fable," p. 98.

(12) Patrick Reilly, *The Literature of Guilt: From Gulliver to Golding* (Macmillan, 1988), p. 145.

(13) Charles Monteith, "Strangers from Within," *William Golding: The Man and His Books, A Tribute on his 75th Birthday*, ed. by John Carey (Faber, 1986), pp. 57-63.

(14) W. Golding, "Nobel Lecture 1983," *A Moving Target*, pp. 203-4.

——文学部教授——